

# 飛耳長目

通巻188号 令和元年7月1日発行

## 一 「開頭」第73号巻頭言

戦後特に独立以来、時々「救国」という言葉に出くわすが、私はあまりこの言葉を好まない。それはひとりで国を救うなどということは、よほどの優れた人ではない限り不可能であり、特に全てが組織によるでなければ、不可能になりつつある現代においてそうである。ある意味でこの言葉に該当するかと思われる人が、私の知る限りにおいて「人々あるが、それについてはそのうち紹介の筆を取るつもりである。ところがささやかな私ごとき人間のしている事に対してさえ、時に

この言葉を使われる人に出くわすが、たとい単なる辞札だとしても、相去る千里である。だが今夏比叡山における夏安居の感想中、「先生の悲願の一端が分かりだした感がする云々」という文字に出逢って、敗戦以来今日まで持ち続けてきたもの、いや、最近になっていよいよ深まりつつあるものが、考えようによっては、悲願というものでもあろうかと、我ながら初めて考えさせられた次第である。だがこうは言っても、その内容たるや、別に新しいものではなく、「国民教育の真の確立」ということの外にない。もしこれをしも悲願というべくんば、私もまた「悲願を持つ者」の「人々」と言うべきかもしれない。（「開頭」昭和28年9月発行通巻23号 九月号）

二 何ゆえ「整風文獻」を選んだか  
↳ 夏安居における序説

森信三

一 講本の決定が遅れて、皆さんに大変ご迷惑をおかけしたことを恐縮しています。実は戦後になって以来、読書会で講本を決めるのが大変難しくなってきたのであります。あるいはこうした感じは私だけかもしれません。他の人々と同じように

問題について話し合ったこともありませ  
んで、他の人々がこの点をどう考えて  
いられるか、存じませんが、少なくとも  
私にとつては、この感が深いのです。そ  
のため読書会の相談を受けましても、  
時間の点からよりも、むしろ講本問題の  
方が厄介で、そのためにもう一つ積極的  
になれぬという場合が、少なくないの  
です。そうしていこうした事は、戦前には  
全く感じなかつた事柄であります。では  
これは一体どういうわけでしょうか。

これを一言で申せば、「一切の書籍の相  
対化」ということであります。これを、  
もう少し具体的に申せば、マルキシズムの  
出現以前には、絶対的と考えられていた  
書物の意義が、全てその絶対的意義を喪  
失してきたと言ふことであります。例え  
ば試みにキリスト教の聖書をとつてみま  
しょう。すると聖書というものはマルキ  
シズムの出現以前には、何人もその絶対  
性を疑つた者はないのでありまして、仮  
に あつたとしてもそれは特殊な一部の学者  
に限られていたのであります。

しかるにひとたびマルキシズムが現れ、  
特にその地上的実現としてのソ連邦およ  
び中国が出現しますと、聖書の教えさえ

も絶対的ではないということ、人々が  
感じ始めてくる……これを他の言葉で申  
せば、「聖書でさえ絶対的とのみ言えない  
一面のあることを、人々が気づき初めて  
きた」ということであります。換言すれ  
ば、聖書の教訓は「愛」の教えであるに  
対して、マルキシズムは不正に対する  
「憎」を力説するものだからであります。

このことは中共についても言えること  
でありまして、なるほど中共の文献の中  
には時に孔子の言葉を引いている場合も  
ないではありませんが、しかし全体の調  
子としては孔子的な考えを、根底から一  
度裏返して見る立場であると言えるであ  
りましょう。つまり一言にして言えば孔  
子教に対して批判である。今手元に文献  
を持つていませんので、いちいちその証  
拠をあげることとはできませんが、しかし  
中共の文献全体を貫くものは、マルクス  
・エンゲルス・レーニン・スターリンを  
貫通してきたいわゆるマルキシズムであ  
つて、それはマルキシズムが西欧におい  
て、キリスト教に対する批判的プロテス  
トであるのと全く同様であります。

このようにして、聖書とか論語とか言  
われるものは、これまで人類の聖典とし  
て、全く何人もこれに対して批評がまし  
い態度をとる事は許されないものとして

タブー視せられてきたのに対して、今や  
これに対して公然たる批判のプロテスタ  
トが見られるようになってきたのでありま  
す。

ところでわが国においては今回の敗戦  
によつて、これまで絶対視せられてきた  
国体観念の崩壊とともに、初めてこのよ  
うな根本批判の立場が現実的に受け入れ  
られたのであります。でありますか  
ら、もし敗戦という最大の悲劇的な出来  
事がなかつたとしたら、一切の典籍の「相  
対化」ということも、またこれほどに深  
刻な現実感を持つて受け取られるには至  
らなかつたかもしれませぬ。

このような事情によつてこれまで読書  
会においてテキストを選ぶのに、何ら困  
難感じなかつた私たちなのに、如何なる  
書物も相対的な感じがして、一体どれを  
選ぶべきかに迷うのであります。しかも  
このことは畢竟人類の歴史が今やテーゼ  
の時代からアンチテーゼの時代に移行し  
かけている証拠と思われるのであります。

そこで次に問題となることは、「それで  
はアンチテーゼの時代を導き入れんとし  
つつあるマルキシズムの書物を選んだら  
どうか」ということが問題となるわけで

あります。

ところがこの点に関しては、マルキシズム自身が批判の立場。プロテストの立場に立つ者として、それ自身相対性を示現しているということであります。それゆえ今や人類は論語や聖書が相対化したからといって、それらを投げうって、「資本論」以下マルキシズム関係の文献のみが、人類の絶対的典籍に化したとは言えないのであります。一面からは確かにそうした断言を迫るものがありながら、他の一面どうしてもそうだとは言いきれないものもあることを、人類の本能感覚は、我われに感受せしめるのであります。ではこれは一体どういうわけでしょうか。

聖書や論語が相対化したと言いながら、しかも「資本論」を以てこれらのすべてととり換えると言うこともできかねるもののあるのはなぜでしょう。それは聖書や論語は人類文化のテーゼの時代の自覚的始源を示す代表的典籍として、時代的には相対化したけれども、本質的にはなおその絶対性を保持している。これに反してマルキシズムの諸典籍は人類のアンチテーゼの時代を導くものとして、時代的には絶対化しつつあるけれども、その故を以て本質的に絶対化したとは言えない……と言えるでありましょう。今以上

に述べたことがらを要約的に申しますとすれば、聖書の精神を最も端的に表すことばが「汝の敵を愛せよ」と言う言葉であるとするれば、マルキシズムの精神を現すものは、不正なる「汝の敵を憎め」という言葉であることによっても分明であると言えましょう。

かくして以上述べてきたことを一言で言えば、「マルキシズムの出現によって、マルキシズムをも含めた一切の書物が相対化した」ということでありましょう。人によつてはこのような言葉によつて、何んとなく頼りなくなりがちになり、がっかりした感じを抱く人もあろうかと思えますが、実はこれによつて初めて人類は真の自由の一步を踏み出したと言つて良いであります。すなわちこの地上ではいかなるものも「絶対的絶対」なものはありません、いかに絶対的だといつても、それが地上的存在である限り、すべては「相対的絶対」たるに過ぎないといふことが、書物文献の上にも初めて明らかになり出したことを意味するからであります。

そこで問題は、では一体どういうわけ  
で今回のテキストにこの「整風文献」を

選んだかということになります。それは第二には時代の趨勢からして、どうしてもマルキシズム関係の文献から選びたいと思つたということ、そして第三にはマルキシズムの文献中から選ぶとすれば、結局中共の文献から……と考えたと言ふことでもあります。このうち第一の方は説明せずともわかつていただけるかと思うのですが、マルキシズムの文献というのは、人にもよりましようが、一般的にはなかなか入りにくいものであります。特に本誌の誌友諸氏には、そうした人が多いのではないかと考えられるにつけても、それだけ今日の時代においては、何か一つ入門の手引きになる良書を選んで購読してみたら……と考えたのであります。

ところがこの第三の点、すなわちマルキシズムへの入門を中共の文献にしようとした事は、順次これから本文を購読していくことによつて、おわかりになると思えますが、一般に中共の文献と言ふものは、マルクス・エンゲルスはもとよりのこと、レーニン・スターリンのものに比べてみても、格段にわかりやすいのであります。

この点は今後いろいろな意味で非常に重大な問題だと思ふんですが、とにかく中共の文献は読みやすく、しかもわか

りやすいのであります。そしてこのことは特に毛沢東の文献について言えると思います。レーニンやスターリンのものを読んでおきますと、秋霜烈日、まるで牢獄のごとき峻厳さが感じられるに對して、毛沢東の物を読んでいきますと、ほんわりと暖かく、まるで早春の土の暖かさにも似たものが感じられるのであります。それがいかなる理由によるかというような点は、順次本文の講読によつて説明してまいります。とにかく中共の文献は、同じくマルキシズムを背骨とすると言いつつながら、レーニンやスターリンの文献とはその調子の上で必要な違いがあるのであります。

か、それともこの「整風文献」にしようかとずいぶん長い間迷ったあげく、最後にこの本をとったのですが、それは「実践論」以上にこの方が分かりやすく汁気が多いからであります。

か、かくして私が今回の夏安居のテキストとしてこの書を選んだのは、大体以上のような考えからして、第1にこれによつて我々が現在当面しつつある世界史の現段階の意義を明らかにしたいということ、

第2には隣邦中国の未曾有の大変革を導きつつある指導理念がいかなるものであるかを知る事。第3にはそれからして中国とわが国との現実的諸条件の共通点と相違点を比較対照することにより、今後わが民族の行くべき方向を見出したいということであります。

これらの点からして、私として今日ほぼ確定的に言い得る事は、今日我らの民族にとつてファイフテの「ドイツ国民に告ぐ」に代わるべき書物はまさにこの「整風文献」だということであります。すなわち端的に言つて今や我々はフフテの「ドイツ国民に告ぐ」を投げうって、毛沢東のこの「整風文献」と取り替えねばならぬということであります。この言葉は意外と思われる方も多いかと思いますが、それはファイフテの生きていた時代および彼の置かれた国家の環境よりも毛沢東のそれの方が、はるかに我々の今日の現実に近似しているからであります。

最後にもう一つ。それはこの「整風文献」は中共革命を成就せしめた偉大な実現建設の真理でありますから、したがつてそれはまた見方を変えれば、現在我々の当面している「国民教育の再建」に對しても、そこに多大の示唆と暗示とが含まれているという点であります。もちろん

んこの書自身は一応政治的建設の立場で説かれているのであるが、しかし我々としては同時にそれを「教育再建の真理」として、転読し活訳して行かなければならぬと思うのであります。マルキシズムに關しては全くズブの素人に過ぎない私が、この書を講読するにあつて、もし多少なりともそこに取り得があるとしたら、この「点位のものでありましよう。

(昭和28年8月5日発行「開頭」第72号8月号)

あとがきに替えて

今号は森信三先生が一時「石」に興味を示された時代の内容である。「石」を愛でるブームが起こった頃かと思う。ご自身も複数の石を収集され、地方を巡った際も各地で名のある石を風呂敷に包んで持ち帰られた。しかし、石を人工的に磨く流れが来たとき、きっぱりと止められたと聞く。尼崎の実践人の家にも複数残っている。森信三先生は花や果物また季節の微妙な変化などにも独特な感性を示された。(31日二纂)

〒633-0003  
 桜井市朝倉台東2-538-89  
 電話0744-4513422  
 Email:hj3@ken.jp  
 http://web1.ken.jp/syshn